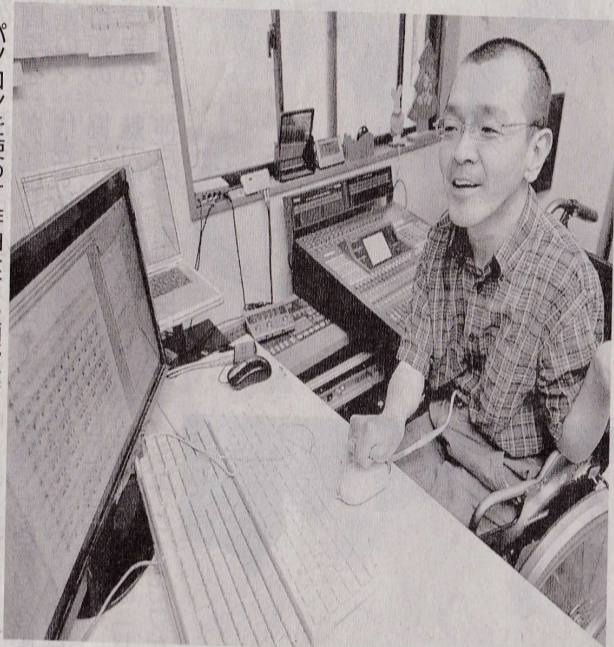


# 脳性まひのバンドマン 浦野さん

## 活動20年記念ライブ

重度脳性まひの障害を抱えながら音楽活動続けるバンドマン、浦野健さん(42)は高槻市を中心とした「URANO BAND」の20周年記念ライブが11月4日に同市高槻町の「URGE TAKATSUKI」で開かれる。浦野さんは「この20年で最高の演奏を届けたい」と意気込んでいる。

【加藤佑輔】



パソコンを使って作曲をする浦野健さん(高槻市の自宅で)

### 高槻で11月4日「最高の演奏を」

生後半年で脳性まひと診断された浦野さんは、現在もスムーズに話せず、手足が不自由なため車いすで生活を送っている。

浦野さんが音楽にのめり込んだのは、中学生の頃だった。文化祭の準備で他の生徒たちが看板作りなどに励む中、手足が不自由で力になれないことに悔しさを感じた。「役に立たない手なんかいららない」と、包丁で自分の手を切断しようと考えた。高ぶった気持ちを静めたのは、テレビで流れる長瀬剛さんの「乾杯」などの人生応援歌だった。

「長瀬さんのような音楽を作りたい」。浦野さんはそんな思いを募らせて高校卒業後、大阪市内の音楽専門学校に入学。パソコンに内蔵されたソフトで音を生み出すデスクトップミュージック(DTM)の技術を学んだ。23歳の秋にバンドを結成。

DTMで曲の原形を作り、バンドメンバー全員で編曲をしていくスタイルで楽曲を制作している。

バンドの結成当初は体力的に歌うことが難しく、コーラスのみで参加していた。だが活動して数年で、女性ボーカリストの月陽さん(45)とツイーンボーカルができるまでになった。浦野さんは「歌い続けることで喉の筋肉が鍛えられた。以前は疲労のため長時間できなかった会話も、この数年で可能になった」と話す。

今も食事や入浴などの介助を続ける母晴美さん(68)は「不自由な思いをしてきた息子が、音楽をやっている間は自由でいることがうれしい」と心援する。浦野さんは「母の支えがあったから音楽を続けてきた」と語る。感謝の気持ちを込めて、初めて作った曲「同じ人間なもの」など10曲を披露する。

午後6時45分開演。チケットは当日券のみで2500円。来場者にはバンドのオリジナル楽曲4曲が収録されたCDもプレゼントされる。



# 毎日新聞

9月29日(金)

2017年(平成29年)

発行所：大阪市北区梅田3丁目4番5号

〒530-8251 電話(06)6345-1551

毎日新聞大阪本社